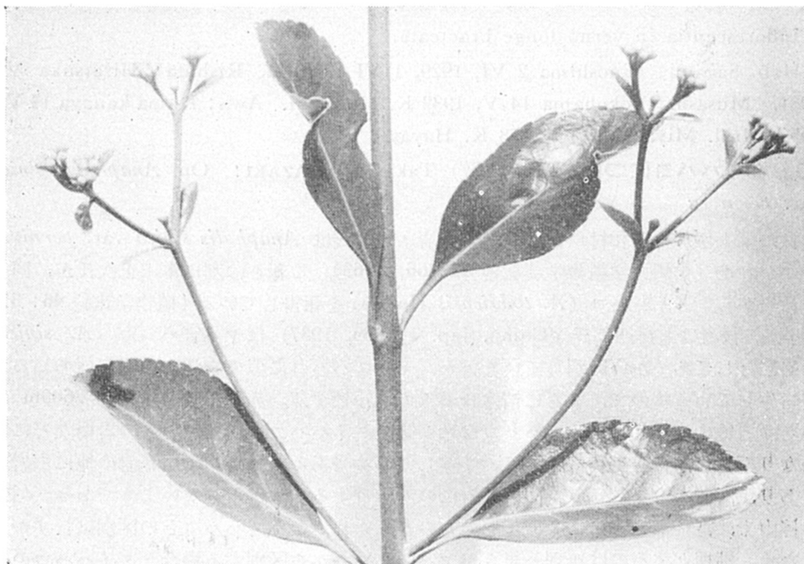
cytoplasmic cells as those of the leafy shoot apex. But in the later stage, as the thorn tip changes from green to yellow and gradually becomes brown, the apical tissue loses its meristematic appearance and then gradually collapses. With the necrosis of the apical tissue the leaf primordia at the apex also become necrotic. The progression of necrosis in a leaf and leaf primordia is basipetal. The tissues of the part below the aborted apex become lignified and rigid. Then the distal portions of the thorn, 3 mm or more in length, gradually die basipetally.

○マサキの一変異品（久内清孝）KIYOTAKA HISAUCHI: A form of *Euonymus japonicus*

暖流が洗う海岸，ことに東海道の東南部や豆南の島に，ここにかかげた写真のような海浜形のマサキがあり，これが東大標本によると欝陵島でも石戸谷勉氏により採集(1916)されている。私も相州沿岸でたびたびとり，房州の鋸山下の浜金谷でもとっていて，約10年間も栽培している。写真のように花時には花梗上に苞が対生し，この苞は実の頃には落ちるが，花の頃には例外なく着けていて，固定している性質であることに疑いない。マサキの変品種は相当こまかく扱はれて命名されているが，ここでいうものの和名がわ



Euonymus japonicus Ta. forma *bracteatus* Nakai

からないのを，しらべて見たら杉本順一氏が日本樹木総検索表 (1936) p. 220 でハナマサキと命名されたものと一致するので，これをその名としたいと思う。そうして，これには中井博士が標本上に *Euonymus japonicus* Thunberg forma *bracteatus* なる未公表名の手記をのこされていてともに相州江ノ島，平塚産のものである。杉本氏は var. *columnaris* を用いているが，中井さんは南方楠熊氏が紀州日高郡真妻村大字川又で採集されたものに，この学名を起用しカワマタマサキ（未公表）の和名を標本上に手記された。そうして，これも花序に苞のできるもので，この二者が同一物か別物か Carrière のタイプを見ないからわからないが，中井さんに従えば一応両者は別物ということになる。ところが中井さんが植物分類地理 13 巻 (1943) に亜属として，また本誌 24 巻 (1949) や国立科学博物館研究報告 31 (1952) などで *Masakia* 属をたてられたときには var. *columnalis* はのっているが *bracteatus* は見当らないので，後に同一物としての見方をされたものとも考えられる。もしそうだとすればハナマサキ（杉本）の和名がそのままのこるであろう。しかし *columnalis* が樹態から命名されたとすれば，*bracteatus* とは甚だしく異るので，中井さんの手記を一応ここに公表して，これを杉本氏のハナマサキの学名とし，*columnaris* には中井さんのカワマタマサキを用いたらどんなものだろう。示教をまつ。*Masakia* については異説もあるので，ここで *Euonymus* をとり，私の責任で次の名称を公けにすることにした。

Euonymus japonicus Thunberg f. bracteatus Nakai in sched. Herb. Univ. Tokyo.

Inflorescentia in verno longe bracteata.

Hab. Sagami: Enoshima 2 VI, 1929, 1 VI 1930 M. Kishida; Hiratsuka VI, 1931. Musashi: Yokohama 14 V, 1933 K. Hisauchi. Awa: Hama kanaya 14 VI, 1953. Insl. Miyake 15 VI 1958 K. Hayashi

○トダイハハコについて（山崎敬）Takasi YAMAZAKI: On *Anaphalis sinica* var. *pernivea*

長野県上伊那郡美和村戸台川の幕岩で清水建美氏は *Anaphalis sinica* var. *pernivea* をかかれた（信州大学繊維学部紀要 **12**: 66, 1963)。これとは別に本田正次氏が，同じ戸台川からトダイハハコ (*A. todaiensis* Honda) を報告している（植物学雑誌 **46**: 373, 1932)。後者は北村四郎氏 (Comp. Jap. **1**: 239, 1937) はヤハズハハコ (*A. sinica*) の異名としてあつかい区別していないが，ヤハズハハコに似て全体に白毛がいちじるしく密生しているもので，まさに清水氏のものと一致する。赤石山脈の 1300～2600m にわたる岩地にみられるヤハズハハコは殆んどトダイハハコの形で，兎岳の岩場などにはかなりみられる。白毛が密生していて美しい植物である。戸台川でも幕岩の他に白岩にもあり，河原にもみられ，特に石灰岩にのみ生育するとはかぎらないようである。信州の梓山や，富士十二ヶ岳にも似た形のものがみられ，ヤハズハハコとの区別はむずかしくなる。別種とするのは無理と思うがヤハズハハコから区別する場合トダイハハコの和名が使われることになる。（東京大学理学部植物学教室）